

神話と事実 1

神話2 子どもへの暴力の加害者の多くは知らない人である

- ・ 事実は 子どもへの虐待/暴力の85%~95%が、知っている人、しかも多分その子が愛し、信頼している人からなされるものである。これには、親・保護者、家族、青少年団体のリーダー、コーチ、先生、友人、仲間の子どもたちが含まれる。

神話3 少年や男性は性被害にあうことはない

- ・ 事実は 少年や男性も性被害にあう。

1999年の「青少年の性行動全国調査」によると、男子の1.7%が「無理矢理に性的な行為をさせられ」ている（ちなみに女子は7.9%）。

引用文献；（財）日本性教育協会『「若者の性」白書 - 第五回青少年の性行動全国調査報告』小学館、2001年。全国の大都市、中小都市、町村の各4地点ずつから選んだ中学生・高校生・大学生計5492名が対象。

2004年に野坂祐子らが高校生におこなった調査では、男子の2.7%が「むりやりセックスされそうに」なっており、1.5%が実際にレイプされたと回答したと報告している。

また、

女子より割合は低いものの「いやらしいことを言われた」が20.7%に上るなど、男子も同様の性暴力を友達から学校内で受ける傾向が強いことも分かった。

引用文献；（財）女性のためのアジア平和国民基金『高校生の性暴力被害実態調査』2004年参照。

全米での統計によると、18歳になるまでに4人に一人の女子、5人から7人にひとりの男子が性的な被害に遭っている。被害にあった男子の数は女子の数（4人に一人）と同程度であろうと推定している研究者もいる。

神話4 虐待を受けた子どもは、おとなになってから同じように虐待をする

事実は 虐待の世代間連鎖の発生率は、30パーセント±5パーセントであると概算するのがもっとも妥当であろう。すなわち、身体的に、あるいは、性的に虐待されるか、ひどくネグレクトされた人のおおよそ3分の1が、自分の子どもにこれらの虐待をする可能性が高いが、残りの3分の2は、適切な子育てをするだろう、と考えることができる。

米国予防精神医学会報 (American Journal of Orthopsychiat) S7、1978年4月
 ジョーン・カウフマン、エドワード・ジグラーPhD
 イェール大学心理学部、ニューヘイヴン

神話5 変な人や不審者に注意すればいい

- ・ 事実は 大半の加害者は顔見知りであり、普通の生活をしている人。「変な人、不審者に注意すればいい」というのはほとんど役に立たない。（神話2との関連）

神話6 障がいのある子どもは感受性にも障がいがあって、

攻撃されても何のことだか分からないので、傷つかない

- ・ 事実は 障がいのある人が、障がいのない人よりも、より多くの感情的苦痛にさらされているのだということは、多くの研究によって分かっている。

神話7 障がいのある子どもへの暴力はめったに起こらない

- ・ 事実は 子どもへの暴力はどんな子どもにでも起こりうる。障がいのある子どもの被害にあいやすい理由を考えると、他の子どもよりもより暴力にあいやすいことがわかる。

障がいのある子どもたちへの虐待とネグレクトに関する統計では、研究によって様々ではあるが、障がいのある子どもたちは障がいのない子どもたちの2倍から10倍の虐待を受けていることを示している。